

丁紅衛 教授/丁红卫 教授

北京日本学研究中心 / 北京日本学研究中心

日 時 : 2022 年 4 月

場 所 : 北京市内

使用言語 : 日本語及び中国語

聞き手 : 野口裕子

(国際交流基金北京日本文化センター)

時 間 : 2022 年 4 月

地 点 : 北京市内

使用言語 : 日文、中文

采访者 : 野口裕子

(北京日本文化中心 (日本国際交流基金会))

【目次】

1. これまでの歩み

(1) 日本語、日本研究のスタート

(2) 学生時代の研究と留学の思い出

2. 個人の研究について

3. 中国の日本研究について

(1) 日本研究の重要性

(2) 国別・地域別研究拠点としての

北京日本学研究中心

(3) 今後への期待と抱負

【目録】

1. 走过的人生

(1) 学习日语，研究日本

(2) 学生时代的研究，回忆留学生活

2. 关于个人的研究

3. 中国的日本研究

(1) 日本研究的重要性

(2) 作为国别/区域研究基地的北京日本学研究中心

(3) 对今后的期待和抱负

【本文】

※インタビュー対象者の使用した言語に基づいて整理しています。(下線部は日本語でのご発言部分)/根据采访对象所使用的语言来整理。(下划线部分为受访者用日语发言的部分。)

1. これまでの歩み/走过的人生

(1) 日本語、日本研究のスタート/学习日语，研究日本

日本語と出会ったのは大学に入ってからでした。実は大学入試当時は第一希望は英語でしたけれども、自分の生まれ故郷、山東省の青島で日本語の人材が必要であるということで、日本語科に配属されたのが最初のスタートでした。その時は、私自身の希望とかよりも、周りの人たち、親もそうですけれども、自分の高校の先生がものすごく喜んでくれまして、英語はすでに勉強したので、日本語もさらにできればバイリンガルとして活躍できると、すごく励ましてくれまして、喜んで日本語科に行ったわけです。

大学では、日本語の先生はほとんど中国人の先生でした。北京日本学研究中心を定年退職された曹大峰先生も(当時は山東大学で)自分の日本語文法の先生でした。

卒業の後は、私たちの年代ではそれほど情報が発達してなかったものですから、自分の先輩たちが北京日本学研究中心(注:以下、「センター」)に行く、修士課程に行くというのを、どちらかというと口コミで聞いていました。先輩たちから、もし修士へ行くのであればセンターが一番の選択であるとの

すごく勧められましたので、やはり修士課程といえればセンターへ、というのが、当時、我々の一番の憧れでした。それで第一志望は北京日本学研究中心センターにしたわけです。

センターに入ってから我々にとって一番珍しいって言いますか、自分の勉学に一番有益であると思ったのは、当時の先生たちが全て日本から派遣されてきた著名な先生ばかりだったことです。私は社会文化コースに入りましたが、社会学の先生はもちろん、文化、思想史、法律、文化人類学など、すごい先生ばかりで、中根千枝先生はわざわざシンポジウムに参加してくださいましたし、飯田経夫先生は日本で言えば経済学の大先輩で、自分の人生にとって非常に大事な時期になったと思います。

北京日本学研究中心センターでは、私自身にとって本当に一生の恩師である荒山裕行先生にも出会いました。当時は名古屋大学の若手の先生としてこちらに派遣されていたけれども、私の修士の指導教官として大変お世話になりましたので、その後、博士課程の時もぜひ名古屋大学へ行きたいということでまた荒山先生にお願いしましたら、快く引き受けてくださいまして、その後長く、名古屋で5年間ぐらい、お世話になりました。

(2) 学生時代の研究と留学の思い出/学生时代的研究, 回忆留学生活

修士の時は、実は当時の中国、特に都市部では夫婦共働きが普通だったものですから、自分としては日本の専業主婦という存在にすごく関心を持ちましたので、日本における女性の就業行動について分析をしようと考えました。博士課程も引き続き同じテーマで研究をしてみましたし、またその時は先生の指導の下で計量分析も試みまして、日本だけではなく、中国、さらに東アジアの国々における女性の就業パターンについて実証分析をしてみました。ですからどちらかというと日本語を使った経済研究という様子でしたね。

博士課程は1994年から、まずは一年間の研究生として名古屋大学経済研究科に入りました。その後、95年に博士課程に正式に入りまして、その後、名古屋で3年以上留学をさせていただきました。荒山裕行先生の研究室は非常に開放的で、学生たちもいつでも出入りして先生と相談することができるような場所でしたので、私もほぼ毎日先生の研究室へ行って、またチューターの学生と研究について相談をしたりいろいろ議論をしたりすることもできましたので、そこは一番印象深くて、自分の勉学や論文作成にとって一番助かる場所でした。もちろん、先生の留守の時は、全然研究と関係のない話もいっぱいしましたけれども、それも自分にとって社会勉強になりまして、思い出としていっぱい残っていますし、今思い出してもほほえましいって言いますか、心が温まります。

荒山先生について一番忘れがたいことですが、実は当時、ほぼ毎年、国際交流基金が本部で中間発表会を開催をしてくださったわけですね。まさか、ご多忙な荒山先生が名古屋からいらっしゃるとは誰も思わなかったのですが、ほぼ毎回来てくださいましたし、チューターの学生もつれて一緒に行ってくれたりもしていましたので、私だけではなくて周りもすごく感動していると思いますね。今、自分も大学の先生となって、一人の留学生のためにここまでやってくれるとは、思い出しても感動です。

留学時代の一番印象深いこととして、生活面で言えば、身近なボランティアに助けられたことではないかと思います。というのが、当時、私たち国費の留学生は名古屋大学の留学生の寮に入っておりまして、名古屋の市民で構成されたボランティア団体が、例えば新入生が入ってきた時期とか、毎年の新年度と

かに合わせて、いろんな生活用品を集めてバザーを開いてくれるんですね。タダ同然の値段で留学生たちに売って、いろんな生活支援をしてくださったことが印象に残ってますし、自分の生活としてはものすごく助かりました。今、国民感情とかいろいろ言われている時代ですけれども、当時は両国の国民感情も非常に良かった時期ですし、中国だけでなく、アジア諸国、アフリカなどの留学生も身近に日本人ボランティアと接触して、我々にとっては非常にいい思い出になっていたと思います。

2. 個人の研究について/关于个人的研究

修士を卒業してから就職したのは、北京外大日本語学部でした。その後、日本で博士号を取ってから同じ日本語学部に戻ってきて、2005 年からは北京日本学研究中心に入りました。そのきっかけというのは、センターで経済コースを作るという話をお聞きいたしまして、経済コースの担当として、学内の人事異動ではあるんですけれども、センターに入りました。当時は経済コースはまだ独立していたわけではなく、「社会・経済」が一つのコースでした。その後 2010 年ぐらいに、独立した経済コースが立ち上げられたわけです。

実は、今の研究テーマは博士課程の時とかなり変わりました。というのは、当時は労働問題を研究していましたが、中国に帰ってきてからデータ収集が困難でしたので、労働問題で研究を続けることはなかなか難しかったです。自分としてもすごく悩んでいました。しかし経済学というのは、理論などをしっかりと勉強しておけば、いろんな分野で応用は可能なわけです。

ちょうど自分が博士課程の間に京都議定書が成立しまして、京都議定書などの気候変動関連の研究をなさった京都大学の先生も荒山先生の研究室においでくださいまして、その話も聞かせていただきました。それで、荒山先生は文科省の研究プロジェクトを申請し、中国の環境問題についての研究を始めました。私も中国から来た留学生ですので、中国の文献の日本語への翻訳とか、いろいろ手伝わさせていただきました。その当時、自分にとって非常に印象的だったのは、先生が文献だけではなく、何回も中国に来てアンケート調査をしたり、中国の国家環境保護局まで行って政策研究の現地調査などを実施したりしていたことです。研究とはフィールドワークも大事であるということも教わりましたし、中国における現地調査のお手伝いもさせていただきましたので、自分にとってはものすごく勉強になりました。

その後、中国では環境問題が国民の関心事となりましたので、こうなれば、かつて先生のお手伝いで勉強したことをもっと研究しようではないかと思ってですね、日本における低炭素社会の構築、あとは例えば環境と観光の両立、などの研究を始めました。最初の仕事は、日中の環境協力についての研究でした。その後、環境保護局や国家発展改革委員会から、日本の経験を知りたい、ということで（求められて）、自分の研究もそれに合わせて深められるようになりましたね。

この間、北京冬季オリンピックが開催されましたけれども、実はその前に国家発展改革委員会の方と話をしましたら、日本におけるスキー場の環境保護の対策について情報を知りたいというお話をいただきまして、日本の経験を中国に紹介したこともありました。こうした研究を何年か積み重ねて、それを全部、著書にまとめ出版しました。改革開放の 40 年間というのは、日中の環境協力の 40 年間でもあるという風に私は認識しております。

3. 中国の日本研究について/中国的日本研究

(1) 日本研究の重要性/日本研究的重要性

中国の日本研究あるいは日本語教育は、一番最初の時期はどちらかというと日本を理解する人材を育成することが目標だったと思います。しかし日中両国の経済連携がどんどん密になってくるにつれて、要は対中投資が増えてきて、1990年代の終わりごろまでは、中国の日本企業などで日本語のできる人材の活躍する場がどんどん増えてきて、中国で日本を理解できる人材も求められるようになったわけです。しかし2000年に入ってからかと思うんですけれども、日中両国の間で——環境分野が一番多いかもしれませんが——政策協調がどんどん重要になってきております。

例えば、大気汚染一つとっても、隣の国と協力してやらないとなかなか効果が上がらない分野ってありますね。ですからこういった分野においては政策協調や連携がどうしても必要になってきます。また、例えばカーボンニュートラル関連目標の実現を日本も中国も目指していますけれども、温室効果ガスの排出を軽減する分野や政策はそれぞれの国で異なる部分もあるわけですね。その部分で何とか協調、協力をしていく、連携をしていくことがいわゆる政策協調ということなんです。

その政策協調を図るためのベースというのは、やはり日中の相互理解だと思いますね。ですから、言葉ができて、お互いの文化を理解できて、しかもお互いの発想や行動パターンなどをある程度理解できて、ということが重要になってきております。相互理解をベースにしてこそ、政策連携、政策協調が初めて実現できると思います。

環境分野に関して言いますと、最初の時期の日本のODAなどで、中国は一方的に日本から支援を受ける立場でしたけれども、どんどん環境問題が解決され、また中国国内の国民の環境意識も高まってきて、住民たちが環境問題を管理する社会的な管理能力も高まってきていると思います。それにつれて、単に中国が日本から何かを学ぶだけではなく、今度は日中両国の間で協力をしながら、例えば中国で日中の企業や産業界、あるいは地方政府レベルで政策の連携とか事業の連携を図るといったようなケースも増えてきております。それがどんどんまた発展して、今は例えば日中両国が第三国で共同で何かできないか、というような段階に入ってきていると思いますね。ですから、政策協調あるいは今後の日中の様々な分野における協調では、複合的、総合的な人材が求められると思います。

日本学研究センターでも、ほかの学部の学生たちにでも、いつも講義で言っているのは、ぜひ日本の経済とか社会とかを勉強してほしいということです。大学生を相手にする講義ではいつも氷山の図を使って説明しています。例えば、現在、私たちがお互いに見ている、例えば中国人から見ている日本っていうのは、いわゆる氷山の上の部分ですね。いろんな文化とか、アニメとか社会問題もそうですけれども、「上の部分」があるわけですね。それで、同じく日本から中国を見れば、これも氷山の「上」を見ているわけですね。しかしその表面に出ているのは、本当の姿の2割ぐらいであって、下には7割、8割ぐらいの氷山が存在しているわけです。

日中の相互認識の深まりにはいろんなベースが重要になると思います。そのベースとなるのはまさに私たちが今やっている日本語教育。お互いに理解をするための道具の一つとしては言語、言葉がありますね。あとは文学作品で描かれている、人物像とか時代現象とかはもちろん勉強しておかなくてはなりませんし、相手国の文化も理解しなければなりません。社会学や経済学の分野になりますと、これは政策とかなり関連してきますので、やはりその国における様々な社会問題に対する発想や、政策の発展の歴史なども非常に重要になってくると思います。氷山の上の部分も、皆さん見ればもちろん分かるわけで

すけれども、これからの日本研究というのは、氷山の下の部分をしっかり見たうえで、どうやっていけば下ではぶつからないようにすることができるのかといったような研究が、ますます重要になると思います。これは日本だけでなく、日本から見る中国も同じで、言語、文化、歴史をベースとした両国の研究がますます重要になると思いますし、政策に対する理解も重要になると思います。ですから、お互いの立場を理解したうえで、例えば社会問題の解決に関して日中が連携することは、両国だけではなくおそらくアジア各国の社会問題の解決につながるわけですので、アジアにとって、もちろん世界にとってもそうですけれども、日中の相互理解や連携協力がますます求められると思いますね。

(2) 国別・地域別研究拠点としての北京日本学研究中心/作为国别/区域研究基地的北京日本学研究中心

我个人的调查结果表明,在中国第一个使用“日本学研究中心”这样一个说法,应该就是北京日本学研究中心。我认为这个名字的命名是集结了中日两国学者的智慧的一个结果。为什么这么说呢?因为这个是在6、70年代欧美兴起的区域研究之后,由日本国际交流基金会在中国设立这样的一个研究日本或者说理解日本的一个机构,所以我认为这里面是包含了对日本进行综合研究的这样一个思路。我自己说,其实北京日本学研究中心是有国别区域研究这样的DNA存在的。所以,它最早期的时候,它的名字就可以体现出来。

在这个基础之上,北京日本学研究中心在不断扩大它的研究范围,从最早的语言、文学、文化、社会到现在有教育、经济等等。专业也在不断地增加,不断地丰富。这一点在中国国内是非常罕见的。同时,在中国,2012年左右开始,教育部非常重视对对象国的综合性的研究,中国叫国别区域研究。教育部在全国指定了两个作为国别区域研究培育基地的日本研究机构,其中一个就是北京日本学研究中心。所以这个足以体现教育部对迄今为止北京日本学研究中心的人才培养、教学、科研的认可。同时,也是对它未来作为一个综合性的日本研究机构的一个期待和支持。所以现在北京日本学研究中心作为教育部的国别区域研究培育基地之一,现在也是不断得到教育部以及北京外国语大学的大力的支持,在从事综合性的日本学研究以及培养综合性复合型日本研究的人才。

(3) 今後への期待と抱負/对今后的期待和抱負

我还是非常期待中国的日本研究在现在的基础之上再加强两国学术界的沟通 and 交流,因为两国学术界的沟通 and 交流将会对两国的相互理解有很大的促进和推动。而且这种促进和推动可以带动两国国民感情的改善,因为毕竟中日两国是邻国,大家互相理解,有这样一个基础的话,也可以进行很多领域的合作。我觉得经济领域的合作其实是已经非常地深入,也已经取得了丰硕的成果。未来,应该在全球领域,中日两国,可以说各个领域,通过学术研究,提升合作的水平和层次。我觉得这个不仅将有利于两国的发展,也将有利于亚洲,甚至是全球的、人类的和平发展。

我个人想今后把自己的多年积累的学术上的一些研究的基础和成果更多地运用在两国的资政领域,特别是为中国对日本的一些相关的学术或者政策领域的沟通交流,更多地做出自己的贡献。

公開:2023年5月25日

¹丁红卫《低碳环保型社会——日本经验与镜鉴》社会科学文献出版社,2021年